

(特活) CODE海外災害援助市民センター発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL : 078-578-7744 FAX : 078-574-0702
e-mail: info@code-jp.org URL http://www.code-jp.org/
郵便振替 : 00930-0-330579

◆今号の内容◆

- ・ 2009年度基本方針
- ・ 2008年度の主な事業報告
- ・ 2009年度の主な事業計画

2009年度基本方針

昨年度はCODEのこれまでの活動が高く評価され、第15回読売新聞国際協力賞というすばらしい賞を受け、あらためて阪神・淡路大震災の被災地から託されたミッションの重みを感じさせていただきました。

さて昨年はマンマーサイクロン「ナルギス」や中国・四川大地震という大規模災害が相次いで発生し、自然災害の非情さを思い知らされた1年でありました。そうした厳しい状況の中で、懸命な救援活動が繰り返され、さまざまな“支えあい”が積み重ねられてきました。私たちは多彩な支えあいから、再び多くのことも学びました。その一つは、国と国が十分につながなくても、人と人がつながることができるということです。一方、1990年代に入って滲み出してきた世界経済の落ち込み傾向が、一気に金融経済の破綻につながり、それによる深刻な失業問題を引き起こすという経済危機が襲ってきました。世界を襲うこの経済危機は、これまでに経験してこなかった“災害”ともいえるのではないのでしょうか。2009年に入り、経済社会のあり方そのものを問い直す議論まで急速に広がり、重大な事態になっています。これでもかこれでもかとモノを中心に追いかけてきた私たちに対するツケが廻ってきたのかもしれない。14年前、すでに私たちは「ライフスタイルの見直し」を提案していました。それは新しい市民社会を創る力を養おうというメッセージの根幹部分でもあったからです。長い道のりですが、私たちは確実にあの時の「宣言」（第1回市民とNGOの「防災」国際フォーラム）を育てています。

ところで、2009年のニューイヤーとともに、世界中の期待を背負ってバラク・オバマが「チェンジ」という言葉を掲げて、アメリカの新大統領として彗星のごとく登場して来ました。いろいろな国際社会に山積する諸問題を解決するべくリーダーシップを発揮されることが望まれています。ことアフガニスタンに関しての政策には間接的な当事者として首を傾げたいところがあります。CODEはアフガニスタンに関しては、2001年の「9.11」以来、主にアフガニスタンの農家が主体となる草の根の活動として、ぶどう畑再生プロジェクトを支援しています。長年の紛争による疲弊から自立の道筋を見いだせるように、「銃の代わり

に鋤を持って平和を築く」という取り組みが順調に動き出した矢先だけに、イラクから削減した米兵をアフガニスタンへ増派するというバラク・オバマ新大統領が打ち出した政策には、納得のいかないものがあります。決して、武力を持って平和を築くことはできない。いわゆる「目には目を！」で対処すれば、むしろ憎しみの連鎖を拡大するだけだと言わざるを得ないからです。

ところで2010年愛知県で「生物多様性条約第10回目締約国会議」（COP10）が行われます。この「生物」「多様性」という2文字も、阪神・淡路大震災のあと、とても大切なキーワードとしてこれまで育んできました。同会議でその辺りはどの程度触られるのか気がりなところでもありますが、いよいよ本気で「いのち」と向き合わなければ、人類の未来はないような気がします。12000年前から北米大陸にネイティブ・アメリカンとして今も生存し続けているイロコイ族は、7代の子孫のことまで考えて「いま」を生きてきたといえます。私たちが阪神・淡路大震災から大事にしてきた「いま」という言葉にも、共通するものを持っているような気がします。だから、「いま」を生きる私たちは何事に対しても無関心であってはいけないのだろうと痛感します。

CODEはこの14年間、一貫して「最後の一人までを救う」と言い続けてきました。それは目の前で困っている人がいれば、とりあえず「寄り添い」「支える」ということを繰り返すことによって到達するものだと思ってきました。しかし、何度も災害に遭遇することによって、私たちは少しづつ賢く、強くなりました。「支える」という一方通行の行為は存在せず、相互互恵の関係性の上で「支えあう」ということの到達点が最後の一人をも救うことになりうるだろうということにも気づいてきました。私たちは絆を鎖のようにつなぎながら「支えあいの連鎖」を創り続けてきました。これからも、どれだけ遠くにいても「痛みを共有」を忘れず、同時に可能なかぎり身近なところでの「支えあい」の実践を積み重ねたいと思います。

事務局長：村井雅清

2008年度の主な事業報告

(2009年度総会資料から抜粋、要約)

● 災害救援プロジェクト

◆アフガニスタン救援プロジェクト

【2002年7月17日からの継続事業】

昨年以降、自爆テロ事件の発生が全土で顕著になるなど治安状況が悪化しているアフガニスタンですが、そうした状況下でも、今年で6年目になるぶどうプロジェクトにて支援している農家の皆さんは、着実にぶどう栽培を改良し、成果をあげています。

昨年行われた2年目のJICA草の根技術協力事業（地域提案型）による山梨県・兵庫県での有機栽培によるぶどう農業研修にて、研修生の皆さんは、剪定の方法や、雑草や動物の排泄物などの堆肥利用といった有機農法の手法を学ばれました。研修後、現地ではモスクなどでのワークショップにより、有機栽培が重要との認識を広めました。また棚式・垣根式栽培の普及により、ある程度の増産も可能になったようです。

ぶどう基金はこれまでの報告により、貸し付け開始から5年間で合計446世帯のぶどう農家が基金をもとにぶどう畑を再生し、そのうちの192世帯が基金への返済を完了しています。また基金は地元のシューラという評議会が管理をしていて、シューラの協議の元、現在は棚式栽培のための柱を立てたり、剪定要員の確保に使っているようです。

◆イラン南東部地震救援プロジェクト

【2003年12月26日からの継続事業】

CODEが支援のため建設したコミュニティセンターは、現地の被災者主体の運営・管理に移行しました。同センターは順調に運営されており、中心になって管理・運営スタッフになっている被災者の女性達も活躍しています。

◆ジャワ島中部地震救援プロジェクト

【2006年5月27日からの継続事業】

2006年にインドネシア・中部ジャワ地震の被害を受けた、ジャワ島中部の中心都市であるジョグジャカルタ市から36キロメートル離れたGiri Sakar(ギリサカリ)村。CODEはこの地においてこれまでの住宅支援等の復興支援から持続可能な暮らし支援プロジェクトへの移行に挑みます。この地域は、被災前から水不足に悩まされてきていました。2008年11月度理事会において、“呼び水プロジェクト”として持続可能な水の確保を目指して、支援に取り組むことになりました。災害を機に、地震前から壁として立ちまわっている地域の貧困と水問題に立ち向かい、このプロジェクトを呼び水に、この地域の問題の解決に繋げるのです。

行政は水パイプを幹線道路沿いに敷設する事業を進

めて来ましたが、この村の場合は、幹線道路から1km離れており、枝管を敷設するには費用が高額なため、村の人々は民間業者から水を買っていました。CODEの支援によって、ウォータープロジェクトの第一段階として本管から枝管を敷設し、一度その水を貯水タンクに貯め、使うようにしました。一方これまでも乾季に水が枯渇していた現状を解消するために、雨期の雨水を貯蓄するタンクを造り、通年としての水の確保に務めてきました。しかし、それでも乾季を通して賄えるだけの水が確保出来ないため、他の方法に挑みながら模索を始めました。乾燥地農業などの成功事例を参考にしながら、持続可能な農業に取り組むことによって、永続的に水を確保する方法です。最初のCODEの支援で弾みがついた同村は、村の若者を中心に少額の資金をプールし、マイクロクレジットシステムを導入してナマズの養殖事業、唐辛子の栽培などにチャレンジし、自立した村の地域経済の確立に向けて活動を開始しま



した。また試験的に山羊の飼育も始めたそうです。CODEは、こうして被災した村の住民が主体となって、持続可能な水確保を目指す活動を支援しており、これを“呼び水プロジェクト”と命名しました。

◆「バングラデシュサイクロン」シドル」救援

【2007年11月20日から】

2007年11月15日にバングラデシュで発生したサイクロン“シドル”に対して、CODEがこれまでに交流を持つバングラデシュ防災センター所長サイデュール・ラーマンさんの提案を受け、被害のあった孤児院2件の補修再建を決定。トタン屋根のある建物の中に孤児院を作る、清潔なトイレを2つ、キッチンを作る、太陽エネルギー活用の装置を導入する、服飾、大工、石工などの訓練コースを提供する、レンタルショップの設立など所得創出活動を始める等の支援活動が確定しました。

◆ミャンマー（ビルマ）・サイクロン「ナルギス」救援プロジェクト

【2008年5月7日から】

サイクロン「ナルギス」の被害は、国際社会への発信の遅れと、ミャンマー軍事政権の他国からの支援を拒んで来たため甚大な被害となりました。その後、国連の働きも影響し、一応の支援活動が続けられています。CODEは情報収集の結果、CODEの正会員である鵜飼卓医師が理事長を務める「HuMA（災害人道医療支援

会)」を通して支援することとし、HuMAの活動を見守っていました。最終的に、生活のライフラインである水不足を招いているエラワディ管区モラマインジャン地区での井戸掘りプロジェクトを支援することとなり、合計8基の井戸を掘る結果となりました。井戸を提供することで同被災地の住民は大変喜んで下さったという報告を受けました。なお、CODE寺子屋として、2009年3月19日にCODEとHuMA共同でのミャンマーサイクロン支援報告会を行いました。

◆スマトラ沖地震津波災害救援プロジェクト

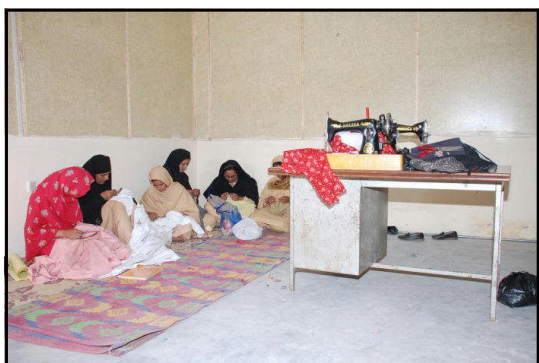
【2004年12月から継続事業】

同津波災害後、同国で実施してきた幼稚園・保育園再建支援事業で唯一件の施設建設が大幅に遅れていましたが、やっと2008年12月に完成。これを持って津波後のスリランカ支援事業はすべて完了しました。

◆パキスタン北東部地震救援プロジェクト

【2005年10月から継続事業】

CODEは被災女性の生計向上支援職業訓練センターの建設を支援してきました。2009年1月23日、現地のムザファラバード開発委員会よりセンターの完成と事業



の開始を伝える連絡があり、これでパキスタン地震に伴う支援事業は終了しました。

●ネットワーク作りに関する活動

◆2007年度より始まった神戸学院大学社会貢献・防災ユニットへの講師派遣は、本年度も継続して行っており、前期課程13回の授業、及び6月17日の中国四川地震報告会、11月15日の国際環境防災シンポジウム等にCODE理事や現地派遣スタッフを講師派遣しています。

講義の題材としては、「災害時における地域力」「援助論と開発」「災害復興と地域経済の自立」「ジェンダーの視点から考える減災サイクル」「農業が担う持続可能な社会づくり」などです。

◆コープこうべ2007年度に続いて2008年度も事業計画に「CODEとの連携」が掲げられていることもあり、積極的に報告会に参加してきました。これまで3度のハート基金(コープこうべ災害緊急支援基金)運営委員会、またコープこうべ役職員会議にて、四川大地震救援プ

ロジェクトの報告をしました。

2009年度の主な事業計画 (2009年度総会資料から抜粋、要約)

◆中国・四川大地震救援プロジェクト

【2008年5月13日から継続】

雲南省に滞在していたCODEスタッフが同地震発生後3日目に被災地成都に入り、避難所や不自由なテント生活をしている被災者に寄り添いつつ、毎日



総合活動センター 完成予想図

100キロを超える被災地を調査し続けてきました。何が足りないのか、何が必要なのか、住民の声にずっと耳を傾けていました。ある程度の調査を終えた後、主な支援対象の地を最終的に北川県香泉郷光明村とし、毎日同村に入りガレキの片付けなどを被災者ともに行うことで、少しずつ住民の信頼を得ることができました。時には各国のボランティアを引き連れ、時には各種専門家のコーディネイトをする傍らで、活動を続けました。この間に、村特有の問題点やこれからの展望について情報収集を行い、また住民の方々と幾度となく、様々な話し合いを行ってきました。

そして、2009年2月度理事会で同村でのCODEが行う支援事業が正式決定しました。それは、光明村を含む、香泉郷の7つの村に診療所を含む「総合活動センター」を建設するという内容です。4月13日に建設合意の調印が代表理事と郷政府との間で行われました。調印に至るまでは、センターの設計・企画など、多方面の方々から助言と協力を頂きました。

センターについては、耐震にも配慮しつつ、現地の環境やこれからの地域作りに生かせるように議論を重ねてきました。形式は三合院という、中国の伝統様式であり、構造としては、伝統木造建築の技法を取り入れる予定です。同センターには、診療所の他に村内放送室、文化活動室、村民委員会、会議室などいろいろな機能を備えることになっています。当然コミュニティ再建の拠点ともなるので、村民の主体的な管理・運営に期待したいです。中国の場合は、一般的に地域医療とは言いませんが、むしろ日本で定着しつつある地域医療の経験事例なども情報交換することで、中国の地域医療推進に役立てたいです。同時に周辺の村や隣県の被災地などで活動している現地の活動者ともこ

れまで同様情報交換を密にし、復興途上における成功事例を同村にも生かせればと思います。

◆イタリア中部地震救援プロジェクト

4月6日午前3時32分、イタリア中部の都市ラクイラでM6.3の地震が発生しました。死者は294人以上、倒壊家屋は約15000棟。5万人以上が家を失い、現在も多くの住民がテントやホテルの中で暮らしています。

CODEは早速、各関係機関に募金呼びかけと情報収集を行い、日本航空の協力のもと、4月22日から4月30日の日程でスタッフ1名を現地派遣しました。

今回の派遣の目標は、現地の支援体制がどのようになっているかを把握することでした。特にイタリア社会に必要なカトリック系団体や、世界でもトップクラスの広がりを見せる協同組合の支援については、ここから日本が学ぶべき点も多いという視点を持って調査を行いました。前者については、どんなに小さな村にも教会は必ず1つはある、というイタリア社会ですから、多くの避難所で活動されていました。活動というより、お祈りやミサを始め、暮らしの延長という表現の方が合っているのかもしれませんが。中には教会の設備が半分を占めるテントまでありました。

協同組合については、日本と同様に、早速大規模な募金活動を始めていました。これからの運営がどのように向かうかは、常に注視するつもりです。

もう一点はドクタークラウン（臨床道化師治療）活動を通じた「こころのケア」の実態を見ることです。イタリア政府は今年度の予算に約2億5千万円をドク



被災地で活動するクラウン達と共に

クタークラウン活動に計上しており、現地ニュースからも赤い鼻をつけた多くのボランティアが被災地において活動を広げている事を確認して

いました。現地で和風ピエロとして活動したスタッフも、その効果を十分に肌で感じて帰国した様子でした。「こころのケア」は長期に渡って見ていく必要のある分野です。ボランティアにでもできる「こころのケア」という実態をいかに追求できるかという点を注目していくつもりです。

ラクイラは13世紀半ばに創建された都市です。歴史的な建造物の修正・修繕に注目は向けられがちですが、一方で被害者の多くは近代建築の崩壊による圧死でした。これから一般住宅の耐震化がどこまで進むかを見逃してはなりません。ボランティアの「こころのケア」

活動の展望を含め、神戸や能登の経験・智恵を少しでもラクイラ復興に生かせるように、現在プロジェクトを考案中です。

◆アフガニスタンぶどうプロジェクト09

7月1日から11日まで第3年次のぶどう研修が行われました。アフガニスタンから6人の研修生を受け入れ、昨年と同様に、前半は山梨、後半は佐用にて研修を行いました。有機栽培の基本については1、2年次研修で大部分学ぶことができました。学んだ技術を実際に生かし、研修生自ら他の農家に広めるなどの報告も現地から届いていました。しかしながら、水の確保や病疫の判定、学んだ技術を実践する場合の初期費用などの課題も依然として残っています。最終年度である今研修では、それらの問題ひとつひとつを解決していく講義・実習と、これから10年間の計画を作り上げるためのディスカッション・ワークショップが主に行われました。



研修生と澤登家講師の方々、ぶどうの下で

ぶどう有機栽培のパイオニアである澤登家の皆様のご協力を得て、研修生の知識もかなり定着してきたようです。

これまで学んだ事を現地で実践した上での研修生の質問。それに具体的なデータや数字を併せて、明確に答えていく講師の姿。3年次らしい、大変実践的な研修ができました。細かい疫病の確認や、cm単位で討議される栽培方法など、かなり詳細なところまで議論が進んでいる様子は、1年目の研修からはなかなか想像できないレベルまで到達した感がありました。山梨での最終日は、澤登芳さんの使いこまれた剪定ばさみを、芳さんの孫の手によって研修生に渡されるシーンがありました。村にとっての最高の宝となったに違いありません。

一方佐用では、棚田石積みや大豆加工品などの研修を通して、より幅広く安定した生産活動を行うための研修ができました。さらに、これまでの研修関係者との討論会も行い、これからのアフガニスタンにとって必要な要素は何か、という点を洗い出していきました。そしてさすがのホスト町、交流会ではいつも以上に私達を和ませてくれました。このホスピタリティーには本当に感謝の気持ちで一杯です。

さて、これらの研修を踏まえ、10年計画を作成しました。特に重要な計画は4つ。①主体性を持った情報共

有を今後も続けていくこと。②化学肥料・農薬からの脱却を図り、持続可能な有機ぶどう栽培を行うこと。③地区特産のぶどう品種を作りだすこと。④協同組合を中心にしたコミュニティを再生すること。CODEはモニタリングと情報共有を進めて、以上の計画の状況を順次追っていくつもりです。

(研修の詳細はぶどう新聞にて掲載予定です)

☆ぶどう農家「澤登芳」さんがJICA兵庫より表彰!

JICA兵庫は、今回の研修講師の1人である澤登芳さんに対して、3年間のアフガニスタンへの技術支援の情熱と功績とを讃え、表彰することを決めました。8月1日にJICA兵庫所長が山梨を訪れ、表彰を行う予定です。この場には、東京在住の中川監事も同席します。

芳さんの兄が実際にアフガニスタンよりぶどうの苗を持ち帰り、山梨で育成したのがこの地のぶどう栽培の始まりでした。芳さんが後を引き継ぎ、努力と苦勞を重ね、現在の広大なぶどう畑を築いたということです。最初の数年間はまったく成果が上がらなかったということです。いかにアフガニスタンのような、ぶどうに適した環境を日本において作りあげるか。いかにぶどうの品種を日本の環境に適したものにするか。その両面から研究を重ね、化学肥料や農薬に頼らない、



研修生と議論を交わす澤登芳さん

本当の意味で自立し、持続可能なぶどう栽培方法を探求し続けてきたのです。

これらの経験がぶどうの起源でもあるアフガニスタンの地に

生かされることは、芳さんにとっての何よりも喜びだということです。あとは平和なアフガニスタンでおいしいぶどうが栽培されるのを待つだけとなりました。ぜひとも朗報を届けたいところです。

2009年度総会が開かれました

6月20日(土)、兵庫県民会館にて2009年度総会が開催されました。正会員14名、オブザーバー6名の合計20名が出席しました。議案である2008年度の事業報告・決算、2009年度事業計画・予算について審議が行われ、すべて承認されました。役員については、設立より就任頂いていた島田誠理事が退任され、新しく藤野一夫理事をお迎えすることになりました。また、コープこうべからは、秦正雄理事に代わり、山添令子理事が着

任されます。

今後ともみなさまからのご支援・ご協力のほど宜しくお願い致します。(総会報告についての詳細が必要の方は事務局までご連絡ください。)

<2009年度運営体制>

代表理事：芹田 健太郎 神戸大学名誉教授/愛知学院大学教授

副代表理事：室崎 益輝 関西学院大学総合政策学部教授

災害復興制度研究所所長

副代表理事：水野 雄二 (財)神戸YMCA総主事

理事：黒田 裕子 支援プログラム部会長/阪神高齢者支援ネットワーク理事

理事：西 正興 (株)神戸スイーツポート相談役

理事：野崎 隆一 ガイドライン部会長/神戸まちづくり研究所事務局長

理事：山添 令子 市民参画部会長/コープこうべ常勤理事

理事：榛木 恵子 人材育成部会長/関西NGO協議会事務局長

理事：藤野 達也 (財)PHD協会総主事代行

理事：松本 誠 市民まちづくり研究所所長

理事：村上 忠孝 財務部会長・村上環境住宅研究所所長

理事：吉富 志津代 多言語センターFACIL代表

理事：藤野 一夫 神戸大学大学院国際文化学術研究科教授

理事兼事務局長：村井 雅清 被災地NGO協働センター代表

監事：中川 和之 時事防災リスクマネジメントWeb編集長

監事：飛田 雄一 (財)神戸学生青年センター館長

活動記録 08/12/25~09/7/15

- 1月7日 甲南女子大学で講義(村井理事・尾澤)
- 1月8日 JICA防災分野協力指針報告、意見交換会に参加(村井理事・黒瀧・尾澤・小川)
- 1月10日 堺女性大学の国際理解セミナーで講演(尾澤)
- 1月13日 関学災害復興制度研究所フォーラムで対談(村井理事)パネリストとして参加(吉椿)
- 1月15日 神戸市立楠高校で講義(村井理事)
- 1月17日 ぼたんの会「竹下景子」詩の朗読と音楽の夕べ」
- 1月18日 国際協力入門セミナー「私たちにもできる国際協力」で基調講演(芹田代表)
- 1月19日 UNCRD国際防災シンポジウムで基調講演(室崎副代表)、パネリストとして参加(村井理事)
- 1月23日 ジャパンプラットフォーム関西報告会参加(尾澤)
- 1月24日 堺女性大学の国際理解セミナーで講演(尾澤)
- 2月4日 神戸市立楠高校で講義(村井理事)
- 2月12日 コープこうべ役職員会議で四川地震現地支援活動報告(村井理事・吉椿)
- 2月21日~4月20日 四川地震第5次派遣(吉椿)
- 2月19日 松蔭女子高校で講演と翻訳実習(村井理事・尾澤)
- 2月26日 県立大学地域ケア開発研究所で講義(村井理事)
- 3月3日 第6回都市地震工学国際会議に参加(村井理事)
- 3月11日 阪神・淡路大震災と四川大地震との事例比較セミナーに参加(村井理事)
- 3月19日 ミャンマー支援事業報告会(HuMA鶏飼理事)

3月26日 コープこうべハート基金運営委員会で講演（村井理事）

3月27日 ラストフライデー講演会で講演（村井理事）

<4月6日 イタリア中部地震発生>

4月7日 イタリア中部地震支援活動開始

4月14日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（村井理事）

4月18日 防災教育ワークショップ「めだかの学校」：
紙芝居シアター「わたしたちの生きる星」

4月21日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（村井理事）

4月23日～30日 イタリア地震派遣（尾澤）

4月27日 四川地震報告会in名古屋（吉椿）

4月28日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（牧秀一さん）

4月29日 UNCRD・CODE四川大地震合同報告会（芹田代表理事、村井理事、吉椿）

5月6日 イタリア派遣報告会（尾澤）

5月10日～6月17日 四川地震第6次派遣（吉椿）

5月12日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（松本理事）

5月14日 日中友好協会主催四川地震1年イベントで講演（村井理事）

5月19日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（村井理事）

5月21日 ぼたんの会・夜会

5月23日 関西NGO協議会総会に出席（村井理事）

5月26日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（本野一郎さん）

6月2日～7日 UNCRDネパールWSで講師（村井理事）

6月9日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（村井理事）

6月11日 佐用町国際交流協会で講演（村井理事）

6月12日 イタリア地震支援チャリティコンサート

6月16日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（斉藤容子さん）、甲南女子大学で講義（村井理事）

6月18日 神戸学院大学で講義（村井理事）

6月20日 CODE総会

6月21日 防災士研修（能登、村井理事）

6月21日～28日 イタリア地震支援チャリティ・ひとりひとりのアート展

6月23日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（村井理事）

6月30日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（村井理事）

7月1日～11日 アフガニスタン農業研修（村井理事・尾澤・小川）

7月14日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義（村井理事）

ありがとうございます 08/12/25～09/7/15

会員・寄付者ご芳名（以下順不同・敬称略）

◆一般寄付（災害救援は除く）

個人：安藤尚一、和田幹司、清宗正明、白水土郎、今中由美子、岸田三枝子、齋藤茂樹、岡本芳子、遠周龍子、小舟愛子、成毛典子、三宅展子、安部美鈴、三島宣彦、成清佐和子

団体：ダスキン御津、御津ボランティア協会、西覚寺仏教婦人会、めふコープ委員会

◆会員

・正会員

個人：村上忠孝、室崎益輝、飛田雄一、松本誠、浅野壽夫、黒田裕子、西正興、榛木恵子、藤野達也、草地とし子、牧田稔、山田一成、山地久美子、青田良介

団体：コープこうべ、神戸YMCA

・賛助会員

個人：和田幹司、白水土郎、池見宏子、岩崎信彦、黒瀬晴世、大河内隆徹、木下カヨ子、鈴木嶺、水野浩重、大津暢人、斉藤容子、玉岡昇治、後藤賢吾、田中淳子、早城シズ子、上田耕蔵、鶴飼愛子、片岡幸壱、瀬川智子、吉田篤、菊田歌雄、高橋智子、岸田三枝子、平林典子、小林郁雄、山田千恵子、武田節子、岡本千明、藪口隆、江口節、不破雅実、

団体：村井新聞店、小さな友の会

おわりに

景気は底を打った、と言われる昨今ですが、雇用情勢などは相変わらず厳しく、新型インフルエンザの流行など、暗いニュースが多い毎日ですね。世界の情勢を見ても、冒頭にも述べたアフガンの混迷した治安状況など、心を痛める話が続きます。しかしながら、3年目を迎えたアフガンぶどう農業研修では、研修生の間ではぶどう栽培の状況改善のための活発な議論が交わされました。またご尽力くださった山梨の澤登先生ご一家だけでなく、3年間暖かく迎えて下さったり、賑やかな交流会を催して下さった佐用の人々、またその交流会にも参加してくれた、アフガン支援のために募金活動などをし、将来は国際協力を志している高校生Fくんなどに、未来への明るい兆しを感じます。(SM)

悲しいお知らせですが、長年CODEレターの作成などを担当していたスタッフの福田信介さんが、7月21日永眠されました。享年36歳。謹んでお悔やみ申し上げます。

